

あわ のす じん じや きた
淡 洲 神 社 北 遺 跡

調査の概要

淡洲神社北遺跡は、豊川市の西端、音羽川と西古瀬川に挟まれた標高約8～9mの沖積低地に立地する。この沖積低地には他にも、御津川、佐奈川、豊川などの大小河川が流れており、これらの旧河道も随所に認められる。これらの旧河道間は、網目状に自然堤防が発達しており、その上に、集落が散在している。この沖積低地には水田地帯が広がり、自然堤防上は畑地として利用されている。また遺跡の南西には、「為当条里遺構」も残っており古くから水田として利用されたことが窺われる。

調査は東三河環状線建設工事に伴い、平成2年4月～6月まで実施した。調査区周辺の自然堤防上の畑地には、古代から中世にかけての遺物が認められたため、調査区内でも自然堤防上に何らかの痕跡が残されていることが予想されたわけである。調査区は3区（A、B、C）設定されたが、基本層序を概観すると、海拔約9mの現地表面の下に、30～50cmの厚さで客土が存在し、その下に40～50cmの厚さで暗灰褐色シルト層が存在する。このシルト層は現代の水田耕作土と思われ、その直下には粗粒砂を伴う直径2～5cmの円礫が堆積している。全調査区において遺物は、この水田耕作土直下、砂礫層直上より出土しており、明確な遺物包含層、遺構を検出することができなかった。

出土遺物は一定の時期幅を持たず、弥生時代中期と思われる土器片、古式土師器、須恵器等の破片が混在していた。この中に1点、チャート製の石帯が含まれていたことは、河川上流域における国府との関係などから、興味深いものがある。

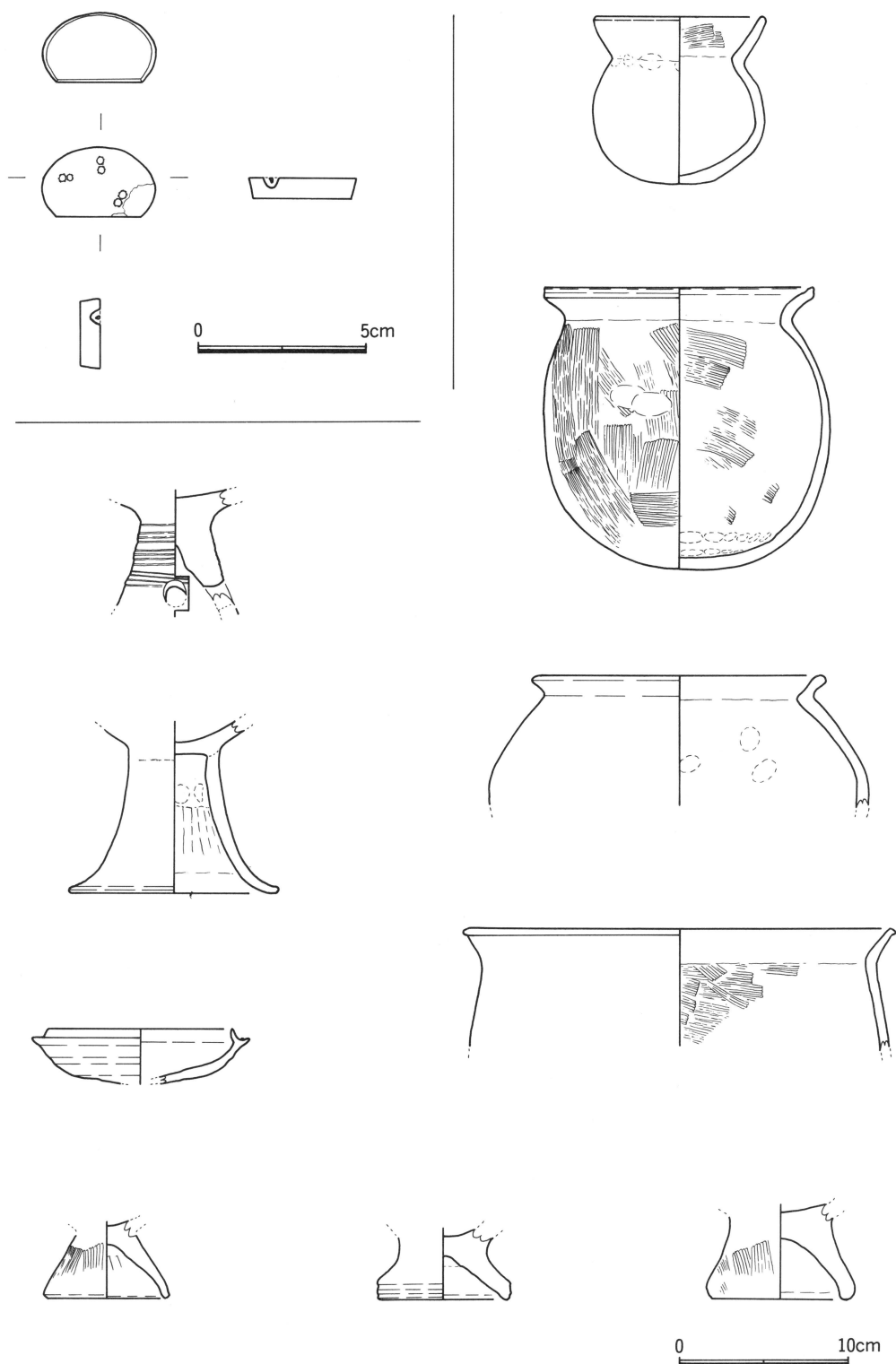
調査の結果本遺跡は、地理的条件、遺物の出土状況・構成から、第一次的遺物包含地とは考えにくく、河川等によって運搬された二次的遺物散布地と思われる。（松田 訓）



A・B区全景（北東から）



A・B区全景（南西から）



第1図 淡洲神社北遺跡出土遺物